

〈看護学科〉

基礎看護学

教授：田中 幸子 基礎看護学
准教授：菊池麻由美 基礎看護学
講師：羽入千恵子 基礎看護学
講師：佐竹 澄子 基礎看護学
講師：青木 紀子 基礎看護学

教育・研究概要

基礎看護学領域では看護学生として初めて行う臨床実習である「生活過程援助実習Ⅰ」のプログラムに、看護職のシャドーイングだけでなく、多(他)職種連携教育の一環として、医師、薬剤師、検査技師等の医療専門職者のシャドーイングをとり入れた。

フィジカルアセスメントについての教授方法の検討および看護援助、看護技術習得のためのeラーニング導入における使用状況の調査を行った。これまでも基礎看護学領域で力を入れてきたフィジカルアセスメント教育についての研究では卒業後、フィジカルアセスメント技術がどのように活用されているのかを臨床と協力し、指導者と卒後1年目の看護師のそれぞれを対象に明らかにした。今後は、その結果を踏まえて学内での教授方法を検討する。

看護援助についての研究では、排泄および安楽、聴覚への音刺激に焦点を当てた準実験的デザインの研究を行っている。また、療養介護病棟でのフィールドワークに基づく運動機能障害患者への援助行為についての記述的研究に続けて取り組んでいる。

これまで、年次進行に応じて学生の臨床についての知覚がどのように変化しているのかについての縦断調査を行っており、2015年には全ての実習を終えた4年次学生へのインタビュー調査を行った。また、1年時に初めて病棟実習を行う学生の実習中の臨床についての知覚の変化を日本看護学教育学会誌26巻1号に掲載し、2年次の初めて患者を受持ち援助する実習での知覚の変化を日本看護学教育学会第25回学術集会で発表した。

「点検・評価」

新たにとり入れた他の医療専門職へのシャドーイング実習は、これまでの看護実践への学びに加え、

他の医療専門職者の役割と活動を知ることで、より自らの看護職への意識が高まるとともに、他職種連携の視点を持つことにつながっていたと考えられ、今後も継続して実施していく予定である。

看護実践能力の育成に向けて精力的に教育方法の検討を行った。特に、フィジカルアセスメント教育については研究結果からも一定程度の効果が確認できている。今後、臨地実習での実践を見据え、確実な技術習得だけでなく、臨床状況に応じた技術の実践ができるようシミュレーション教育を取り入れて教授方法をさらに検討していきたい。また、日常生活の援助に関連した技術の習得にむけて、リアリティのある教授方法の工夫やeラーニングを用いた学習支援などを工夫していきたい。

研究活動については、領域構成員がそれぞれに研究テーマをもって継続して研究を行っている。

研究業績

I. 原著論文

- 1) 田中幸子, 後藤彩花, 緒方泰子, 湯本淑江, 霜越多麻美, 勝山貴美子, 永野みどり. 病院で働く看護職者が就業継続のために求める職場環境. 日看評価会誌 2015; 5(1): 11-8.
- 2) 菊池麻由美. 筋ジストロフィー病棟看護師の行うポジショニングの技. 日看技会誌 2015; 14(3): 238-47.
- 3) 佐竹澄子, 大久保暢子(聖路加看護大). 看護における「ポジショニング」の「技」の検討 看護実践報告の文献検討の結果から. 日看技会誌 2015; 14(3): 274-81.
- 4) 渡邊奈穂. 【学生の答え, ちゃんと待てますか 今こそ知りたいファシリテーションの心構え】学生が安心して参加できる場づくりと深い学びを引き出すファシリテーション. 看教 2015; 56(10): 1064-70.

III. 学会発表

- 1) 菊池麻由美. (口演: 第40群 慢性看護他) 療養介護病棟での看護実践-患者の見え方に注目して-. 第35回日本看護科学学会学術集会. 広島, 12月.
- 2) 菊池麻由美. 長期療養病棟の患者・看護師たちの経験-筋ジストロフィー病棟の場合-. 第1回臨床実践の現象学会大会. 東京, 8月.
- 3) 菊池麻由美, 羽入千恵子, 佐竹澄子, 青木紀子, 高塚綾子, 渡邊奈穂. (一般演題(口演): 臨地実習指導

①) 入学後2回目の実習を行う看護学生の臨床の見え方-実習初日の経験-。日本看護学教育学会第25回学術集会。徳島。8月。

4) 菊池麻由美。療養介護病棟看護師の患者との関係性。日本看護研究学会第41回学術集会。広島。8月。

5) 孫 大輔(東京大)、内海美保(神戸学院大)、川村和美(シッヘルスケアファーマシー東日本)、鈴木佳奈子(家庭支援協会・4UrSMILE4)、根岸哲史(医療法人社団愛友会)、渡邊奈穂、池上敬一(獨協医科大)。(口演22:多職種連携教育(IPE)2)インストラクショナルデザインを用いたIPEファシリテーションプログラムの開発と評価。第47回日本医学教育学会大会。新潟。7月。

看護管理学

教授:永野みどり 看護管理学・褥瘡ケア・ストーマケア

教育・研究概要

I. 教育

学部の教育として、前期の3年生の必修科目「看護マネジメント」と後期の2年生の必修科目「看護情報管理学」は、専任教授の永野みどりが担当した。看護総合演習Ⅳは、複数の担当教員の一人として担当した。総合実習において、2名の4年生の「看護マネジメント」実習を担当した。4年生の必修科目「卒業研究」は2名の研究指導を担当した。科目外の教育活動として、「看護の思いを新たにす式」と「4年生の看護研究発表会」の準備・運営に担当教員の一人として携わった。

II. 研究

1. ストーマ保有者のストーマ外来利用状況に関する研究

1) ストーマ造設術後在院日数と外来ケアニーズとの関連

2008年1月から2014年7月までに直腸癌でストーマを造設しストーマ外来を利用した患者の受診状況を調査したデータを分析し、ストーマ外来利用者のうち「直腸癌でストーマを造設した患者」の術後在院日数とストーマ外来受診時期の実態から、術後在院日数と外来ケアニーズとの関連を記述した。

2) ストーマ保有者の家族の特徴

上記データを分析し、高齢化社会におけるストーマ保有者の家族の特徴とケアニーズを記述した。

2. 看護職の Healthy Work Environment

1) フォロワーシップとリーダーシップ

研究のための現状把握のために、運営スタッフの一員として学会での交流会活動をした。

2) 経験を活用した管理者の学びの可能性とその評価

研究のための現状把握のために、運営スタッフの一員として学会での交流会活動をした。

「点検・評価」

1. 教育

学部教育において、前年度の経験を生かして、内容と方法改善を加えた。看護マネジメントは、臨床現場でのニーズを感じたので、医療安全の講義数を増やした。前年度から引き続き実施した自己学習とプレゼンテーションは、まじめに取り組んでいたが、それ以外の授業では、居眠りや私語などが多くなった。授業参加を促すための声掛けや、授業構成を2部や3部に分けて気分を変えるなど努力はしたが、あまり効果的ではなかった。看護情報管理論の演習では、個人作業に加えてグループワークを組み込んで、内容を深める工夫をした。グループでも、内容は深まらず、深めるための興味・動機づけが無いような状態であった。内容を深めるための枠組みを準備し、説明することが必要であると考えられた。個々のフィードバックは、e-portfolioにより実施し、問題がある学生には個別に指導した。個別に指導するにはマンパワーが不足し、苦慮した。

居眠りを減らして授業参加を促すための仕組みづくりをすることやタイミングの良い個別フィードバックが今後の課題である。

2. 研究

筆頭で海外のポスターで1つ、共著者で国内演題が2つの学会発表ができたが、論文の執筆の方は、1つも出せなかった。論文の作成と学会誌への投稿、ならびに研究費の獲得が課題である。

研究業績

III. 学会発表

1) 永野みどり, 緒方泰子¹⁾, 池田正臣¹⁾, 俣田悦子¹⁾, 安藤禎子¹⁾ (¹⁾東京医科歯科大), 塚田邦夫(高岡駅前クリニック), 徳永恵子(前宮城大). (一般演題(口演))直腸癌に伴うストーマ保有者のストーマ外来利用状況から。第24回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会。千葉。5月。[日創傷オストミー失禁管理学会誌2015;19(2):221]

2) 永野みどり, 緒方泰子(東京医科歯科大)。在院日数と外来ケアニーズとの関連～直腸癌に伴うストーマ

保有者のストーマ外来利用状況から～. 第19回日本看護管理学会学術集会. 郡山, 9月. [第19回日本看護管理学会学術集会抄録集 2015; 246]

- 3) 緒方泰子 (東京医科歯科大), 勝山貴美子 (横浜市立大), 田中幸子, 永野みどり, 菅田勝也 (藍野大). マグネット病院特性を反映した看護実践環境と看護職の退職行動. 第53回日本医療・病院管理学会学術総会. 福岡, 11月. [日医療病管理会誌 2015; 52(Suppl.): 197]
- 4) Nagano M, Tokunaga K, Andou Y, Mamada E. The characteristics and care needs of families of stoma patients and their needs in the aging society. International Family Therapy Association's 24th World Family Therapy Congress. Hawaii, Mar. [International Family Therapy Association's 24th World Family Therapy Congress Program Guide 2016: 13]

IV. 著 書

- 1) 徳永恵子 (宮城大), 永野みどり. 特論: 褥瘡の看護. 渡辺晋一 (帝京大) 著者代表. 系統看護学講座 専門分野Ⅱ: 成人看護学12 皮膚. 第14版. 東京, 医学書院, 2016. p.245-68.

成人看護学

- 教授: 高島 尚美 周手術期看護学, クリティカルケア
- 教授: 佐藤 正美 がん看護学, 緩和ケア
- 准教授: 望月 留加 がん看護学, 緩和ケア, 家族看護
- 講師: 細川 舞 がん看護学, がん化学療法看護, 緩和ケア
- 講師: 室岡 陽子 周手術期看護学, リハビリテーション看護学, クリティカルケア
- 講師: 中川ひろみ

教育・研究概要

学部教育としては, 概論および健康レベルに応じた4つの臨床看護学(慢性期・周手術期・がん・急性期)を学内で教授し, 慢性期および周手術期看護学実習では看護実践能力を修得するプロセスを重視した教育を実践した。研究においては, がん看護学分野および急性・重症患者看護学分野において, 各自の専門性に依拠した継続したテーマを追究した。

I. 教育

成人看護学においては, 対象理解に基づいた問題

解決的思考を育成するために看護過程の展開を重視した教育を展開している。これまでの教育評価も踏まえて, 平成24年度新カリキュラムから新設した, クリティカルシンキング能力育成を目的にした「成人看護実践論」の2回目の開講年度であった。初年度の授業方法をさらに発展させ, 手術患者の術前から術後回復し退院へ向けた教育的ケアまでを含んだ学習を進められるよう, 授業を計画した。授業方法は, グループ学習を基盤としたPBLの方法をとりいれ, 看護計画を立案し, そして立案した計画の一部を実践する演習を取り入れた。また実践的能力を養うために, よりリアリティのあるシチュエーションで思考できるように工夫し, ケースの情報を紙面だけではなく, 独自に製作したビデオ教材を用いて情報を収集し看護計画を立案するワークを進めた。学生は机上で看護計画立案するだけではなく, 演習として実践することで, 自らの課題を見出し臨地実習へつながる学びを深めていた。成人看護学実習全体として, 看護過程の展開における情報収集を含めたアセスメントや看護計画を活用した実践に対する学生評価は概ね肯定的であったが, 教員評価としては部分的に低い傾向があり今後の継続的課題である。

実習環境・体制整備においては, 臨床実習指導者と振り返りを行うことで連携を強化した。看護実践能力を獲得するためには, 実習経験を学生自身が意味づけ, 主体的に学習することが重要である。学生は, 教員が臨床の場に居て適時振り返りをする, 記録を基に看護過程展開に対するヒントを出す, とともに実践する, 安全を確保する, などの教育的介入に対して概ね肯定的に評価をしていた。これらは継続したい点であり, 今後も関係者と役割分担を調整し, 適切な相互作用をしながらの実習指導が期待される。

II. 研究

1. がん患者の看護に関する研究

- 1) 直腸がん前方切除術後患者の排便障害を軽減する看護支援に関する研究

前方切除術後に特徴的な排便障害を軽減する看護方法の開発を進めている。本年度は, 前年度までの研究で一定の効果が得られることが検証された看護支援プログラムを, より効果的に実践で活用するために, 患者配布用としてパンフレットを制作した。パンフレットの制作にあたっては, 大腸肛門外科の医師, 臨床のWOCナース, 消化器がん患者の研究に取り組んでいる看護研究者など, 複数のメンバーと意見を交換しながら作成した。今後は, 作成した

患者配布用パンフレットを広く使用してもらえよう活動するとともに、そのパンフレットを用いた看護支援の効果を評価する研究を進める予定である。

2) がん化学療法に伴う末梢神経障害に関する研究多施設との共同研究として、がん化学療法に伴う末梢神経障害の支援アプリケーションの開発を進めている。本年度はアプリケーション内で再生されるセルフケアに関連した教育動画を作成した。また、一昨年度開発した尺度を患者がモニタリングできるようにアプリケーション内に収め、動画と合わせて使用感等の調査を開始した。

3) HIV 陽性がん患者に関する研究

多施設との共同研究として HIV 陽性がん患者の療養に関する支援を検討した。HIV 陽性終末期がん患者が緩和ケア病棟に入院して療養したケースについて、看護師の感染管理に関する認識の問題点などを検討した。この事例を症例報告として関連学会誌に投稿した。また、HIV 陽性患者に対する感染管理の看護師の認識について調査を継続し、分析中である。

2. 急性・重症患者の看護に関する研究

1) ICU 入室患者のストレス経験の分析

ICU に入室し 24 時間以上人工呼吸器を装着している患者のストレス経験に関するデータ分析を実施し論文化した。96 名の患者の強いストレス経験項目は、「のどの渇き」、「会話のしづらさ」、「気管チューブの不快」等で、関連要因は、緊急入室、挿管時間、既往の無さ、麻薬総使用量、等であった。これらのディスコンフォートな体験を緩和するために必要なケアおよび ICU における End of Life Care を検討中である。

2) 手術中の褥瘡発生状況と関連要因の分析

手術中の褥瘡発生リスクが高いとされている長時間の手術ならびに特殊体位による手術の褥瘡発生を予防するために、現在データを取集中である。今後はそのデータから褥瘡発生状況とその関連要因を分析し明らかにする予定である。

「点検・評価」

教育においては、問題解決能力を高める科目を昨年度の評価に基づきさらに発展させる方法を企画したことで、より効果的な内容・方法で教育を実施することができた。今後はさらに、問題解決能力を高める批判的思考や人間関係能力を育成する授業方法を開発していく必要がある。学習内容が抱負になりすぎる傾向も予測されるため、授業評価による改善を継続する必要がある。実習教育においては、4 附

属病院すべてを実習フィールドとして開拓したため、継続して環境調整を行い充実した教育を継続したい。教員体制としては、成人看護学急性期領域の講師 2 名が新規に着任、新しいメンバーとなり成人看護学領域全体で協力して教育や組織運営を実施した。

研究においては、多くの教員が外部資金を獲得し、それぞれが積極的に取り組んでいる。今後も研究内容を教育に還元すべく、学会発表のみならず論文化することが課題である。そのために、学内・学外研究者とも協力し、時間や環境のマネジメントをしながら取り組んでいきたい。

研究業績

I. 原著論文

- 1) 西開地由美, 高島尚美. ICU に緊急入室した患者の家族支援としてのエキスパートナースのコミュニケーションプロセスの認識. 日クリティカルケア看会誌 2015; 11(3): 35-44.

III. 学会発表

- 1) Takashima N, Kubo S, Nishikaichi Y, Sakai K, Yamaguchi Y, Murata H, Takinami M. (Poster presentation) Stressful experiences in the intensive care unit of patients put on mechanical ventilators for 12 hours or more. 12th Congress of the World Federation of Societies of Intensive and Critical Care Medicine. Seoul, Aug.
- 2) 高島尚美, 西開地由美, 坂木孝輔, 村田洋章. 12 時間以上人工呼吸器管理を受けた ICU 入室患者の経験の分析. 第 35 回日本看護科学学会学術集会. 広島, 12 月. [日看科学会講集 2015; 35 回: 667]
- 3) 本田育美 (名古屋大), 江川隆子 (関西看護医療大), 小笠原知枝 (人間環境大), 佐々木真紀子 (秋田大), 佐藤正美, 曾田陽子 (愛知県立大), 永田 明 (長崎大), 長谷川智子 (福井大), NANDA-I 看護診断 2015 監訳ワーキンググループ/看護診断用語検討委員会. NANDA-I 看護診断 定義と分類 2015-2017・診断名について. 第 21 回日本看護診断学会学術大会. 福井, 7 月. [看護診断 2015; 20(2): 62]
- 4) 中野真理子 (自治医科大), 菊池麻由美, 高島尚美. (口演: 第 9 群 クリティカルケア) クリティカルケア領域におけるベテラン看護師の抑制解除判断にみる格率. 第 35 回日本看護科学学会学術集会. 広島, 12 月. [日看科学会講集 2015; 35 回: 231]
- 5) 中野真理子, 菊池麻由美, 高島尚美. クリティカルケア領域におけるベテラン看護師の身体抑制に関する看護の実践プロセス. 日本看護研究学会第 41 回学術集会. 広島, 8 月. [日看研会誌 2015; 38(3): 164]

- 6) 中野真理子, 菊池麻由美, 高島尚美. (一般演題 (口演): 継続教育・キャリア開発②) クリティカルケア領域における身体抑制を要する患者の家族に対するベテラン看護師の看護実践プロセス. 日本看護学教育学会第25回学術集会. 徳島, 8月. [日看教会誌2015; 25(学術集会講演集): 182]
- 7) Sato M, Enomoto T¹⁾, Yazawa S¹⁾, Arai S¹⁾ (¹Univ Tsukuba). (Poster) The social and psychological effects of dyschezia following low anterior resection of the rectum. 2015 World Congress of Psycho-Oncology. Washington, D.C., July.
- 8) 佐藤正美, 務台理恵子, 瀬山留加, 細川 舞. (口演: 第25群 がん看護) 直腸がん肛門温存術後患者によるWeblogとSNSの術後排便障害に関する記述内容. 第35回日本看護科学学会学術集会. 広島, 12月. [日看科学会講集2015; 35回: 480]
- 9) 高橋 衣, 嶋澤順子, 久保喜子, 佐竹澄子, 石川純子, 北 素子, 村田洋章, 瀬山留加, 櫻井美代子. (一般演題 (示説): 教育評価) 主体的学習態度を育てるコンピューター試験の導入とその評価. 日本看護学教育学会第25回学術集会. 徳島, 8月. [日看教会誌2015; 25(学術集会講演集): 145]
- 10) 野口佳奈, 望月留加, 神田清子 (群馬大). (一般演題プログラム (口演): 第12群 診断・治療に伴う看護4) 食道狭窄により経腸栄養を必要とする食道がん患者の『身体を経験』. 第30回日本がん看護学会学術集会. 千葉. 2月. [日がん看会誌2016; 30(Suppl.): 155]
- 11) 小高順子, 望月留加, 神田清子 (群馬大). (一般演題プログラム (口演): 第21群 緩和ケア2) がん性疼痛を抱える進行がん患者のストレスマネジメントに対するセルフモニタリング法を活用した看護介入の評価 主観的評価より. 第30回日本がん看護学会学術集会. 千葉. 2月. [日がん看会誌2016; 30(Suppl.): 166]
- 12) 国府浩子¹⁾, 雄西智恵美 (徳島大), 浅野美知恵²⁾, 小濱京子¹⁾ (¹熊本大), 近藤真紀子 (岡山大), 望月留加, 宮下美香 (広島大), 村上好恵²⁾ (²東邦大), 森 恵子 (浜松医科大), 山崎智子 (東京医科歯科大), 大釜徳政 (創価大), 新井夫弥子 (愛知県立がんセンター中央病院), 黒沢やよい (桐生大). (交流集会6) がん看護の発展に貢献する研究論文 学術奨励賞研究部門表彰論文から学ぶ研究の進め方・取り組み方. 第30回日本がん看護学会学術集会. 千葉. 2月. [日がん看会誌2016; 30(Suppl.): 308]
- 13) 細川 舞, 瀬山留加, 佐藤正美. (口演: 第4群 慢性看護) HIV/AIDS患者に対する介入研究の動向と今後の課題. 第35回日本看護科学学会学術集会. 広島, 12月. [日看科学会講集2015; 35回: 218]
- 14) 今井 望, 高島尚美. チームダイナミクスを活用した急変対応シミュレーションプログラムの効果の検討. 第11回日本クリティカルケア看護学会学術集会. 福岡, 6月. [日クリティカルケア看会誌2015; 11(2): 215]
- 15) 深井喜代子, 角濱春美, 田中裕二, 高島尚美, 前田ひとみ, 早瀬 良. 論文投稿のA to Z (その4) 日本看護技術学会誌の役割と課題. 日本看護技術学会第14回学術集会. 松山, 10月. [日看技会講抄2015; 14回: 51]
- 16) 濱田妙子 (北里大), 高島尚美. 心肺停止をした患者の家族の発症から初療室における体験. 第11回日本クリティカルケア看護学会学術集会. 福岡, 6月. [日クリティカルケア看会誌2015; 11(2): 158]
- 17) 櫻井祥子 (済生会横浜市東部病院), 高島尚美. 来院時心肺停止の患者家族の急変時から看取りまでの体験と看護介入 家族介入プログラムによる関わりの記録から. 日本看護研究学会第41回学術集会. 広島, 8月. [日看研会誌2015; 38(3): 165]
- 18) 福井美和子 (筑波メディカルセンター病院), 高島尚美. 救命救急センター看護師の家族看護実践度と道徳的感性や倫理教育との関連. 日本看護研究学会第41回学術集会. 広島, 8月. [日看研会誌2015; 38(3): 167]
- 19) 西本佳代 (虎の門病院), 高島尚美. 脳血管障害を発症した壮年期患者を成員とする家族の相互作用に関する研究. 第11回日本クリティカルケア看護学会学術集会. 福岡, 6月. [日クリティカルケア看会誌2015; 11(2): 159]

IV. 著 書

- 1) 高島尚美. 第1部: 画像診断 第1章: 画像診断と看護 A. 画像診断における看護師の役割, 第2章: X線診断 C. X線検査の実際 ③X線検査を受ける患者の看護, 第3章: CT C. CT検査の実際 ③CT検査を受ける患者の看護, 第4章: MRI C. MRI検査の実際 ③MRI検査を受ける患者の看護, 第5章: 超音波検査 C. 超音波検査の実際 ③超音波検査を受ける患者の看護, 第6章: 核医学検査 C. 核医学検査の実際 ③核医学検査を受ける患者の看護. 福田国彦著者代表. 臨床放射線医学: 系統看護学講座 別巻. 東京: 医学書院, 2016. p.18-19, 38, 60, 83, 105, 128.
- 2) 望月留加. 第2部: 放射線治療 第9章: 放射線治療と看護, 第10章: 放射線治療各論 A. 脳腫瘍 ③放射線治療を受ける脳腫瘍患者の看護, B. 頭頸部癌 ③放射線治療を受ける頭頸部がん患者の看護, C. 肺がん ③放射線治療を受ける肺がん患者の看護, D. 食道がん ③放射線治療を受ける食道がん患者の

看護, E.乳がん ③放射線治療を受ける乳がん患者の看護, F.直腸がん ③放射線治療を受ける直腸がん患者の看護, G.子宮頸がん ③放射線治療を受ける子宮頸がん患者の看護, H.前立腺がん ③放射線治療を受ける前立腺がん患者の看護, I.悪性リンパ腫 ③放射線治療を受ける悪性リンパ腫患者の看護, K.骨軟部腫瘍 ③放射線治療を受ける骨軟部腫瘍患者の看護, L.小児がん ③放射線治療を受ける小児がん患者の看護. 福田国彦著者代表. 臨床放射線医学: 系統看護学講座 別巻. 東京: 医学書院, 2016. p.198-206, 210-1, 213-7, 219-20, 222-3, 225, 228-9, 233, 235-6, 241-2.

3) 兼平千裕, 望月留加. 第2部: 放射線治療 第10章: 放射線治療各論 J.骨転移・脳転移・上大静脈症候群. 福田国彦著者代表. 臨床放射線医学: 系統看護学講座 別巻. 東京: 医学書院, 2016. p.236-7.

V. その他

- 1) 細川 舞, 馬渡桃子¹⁾, 小川孔幸¹⁾, 柳沢邦雄¹⁾, 林俊誠¹⁾ (¹⁾群馬大), 大井寿美江²⁾, 高橋有我²⁾, 小林剛²⁾ (²⁾国立病院機構西群馬病院). HIV感染者のがん終末期を緩和ケア病棟で受け入れた1例. 日エイズ会誌 2015; 17(3): 150-4.
- 2) 高島尚美. 【ICU看護 ここが新しくなった!最新動向2015のポイント】コンピテンシーリーダー. 重症集中ケア 2015; 14(3): 74-9.
- 3) 細川 舞, 佐藤正美. 【臨床推論でアセスメント力に磨きをかける!】(Part-3)臨床推論を展開してみよう! (Case 7) 子宮頸がん治療後に骨転移したGさんの痛みへの介入. ナース専科 2015; 35(9): 48-52.
- 4) 細川 舞, 佐藤正美. 【臨床推論でアセスメント力に磨きをかける!】(Part-3)臨床推論を展開してみよう! (Case 6) Fさんへのがん化学療法の副作用に対するセルフケア支援. ナース専科 2015; 35(9): 44-7.
- 5) 細川 舞, 佐藤正美. 【臨床推論でアセスメント力に磨きをかける!】(Part-3)臨床推論を展開してみよう! (Case 5) 初めての化学療法に不安を感じているEさんへのかかわり. ナース専科 2015; 35(9): 40-3.

老年看護学

教授: 梶井 文子 老年看護学
准教授: 草地 潤子 老年看護学

教育・研究概要

I. 学部教育

老年看護学の学部教育は, 2012年度の改正カリキュラムによる実習内容の変更に伴い, 超高齢社会ならびに地域包括ケアシステムの構築といった新しい保健・医療・福祉システムの中での高齢者への多様な看護支援が理解できることをねらいとしてきた。特に2015年度は, 地域の医療機関, 高齢者施設, 自宅に在住する高齢者の多様な健康課題をもつ高齢者への看護支援ならびに地域・保健医療福祉に関わる多職種連携を学習するために必要な知識の理解につながるよう以下の各科目内容を再構成した。

1. 老年看護学概論

1年次前期の老年看護学概論では, 加齢に伴う心身の生理的变化および社会環境の変化が高齢者の生活に与える影響, 高齢者看護における人権擁護と倫理問題, 我が国の高齢者政策の現状と課題について考え, 学生が自身の意見や考えを他者に述べることができるような教育方法を検討し, また高齢者の疑似体験や実際の大学周辺の地域に在住する高齢者との交流等の演習を通じて, 健康な高齢者の理解を深めるように教授した。

2. 老年看護対象論

2年次後期の老年看護対象論では, 老年期の人々に多くみられる症状(低栄養, 摂食・嚥下機能の低下, 認知症, せん妄・うつ, 骨・関節疾患, 転倒, 失禁等)を中心とし, その看護アセスメントについて理解し, 演習を通じて高齢者の自立支援・介護予防に向けた看護実践を教授した。

3. 老年看護方法論

3年次前期の老年看護方法論では, 高齢者に特有の健康障害と周手術期・回復期・慢性期における病態, 治療を理解し, 症状に適した実践方法や, 高齢者およびその家族を対象とした基本的援助方法について, 老年看護に必要な看護理論に基づいた看護過程を, 事例演習を通じて教授した。

4. 臨地実習

1) 老年看護学実習 I

3年次後期の老年看護学実習 I では, 脳血管疾患や運動器疾患等の障害をもつ1名の高齢患者を受け持ち, 術後の急性状況における身体・精神・社会面

の特性を理解し、退院後の自立支援に向けたリハビリテーションを生かした看護過程を実践し、関連の多職種連携におけるチーム医療、看護職の役割について教授した。

2) 老年看護学実習Ⅱ

4年次前期の老年看護学実習Ⅱでは、介護保険の中で、障害を持ちながら地域で生活する高齢者として、認知症対応型共同生活介護(認知症高齢者グループホーム)ならびに介護老人保健施設で療養する高齢者を全人的に理解し、対象者に必要なニーズをアセスメントし、必要な看護実践を行うことや、また高齢者が地域で生活を継続するための地域包括支援センター、居宅介護支援事業所の役割や支援内容と、保健・医療・福祉に携わる各職種の役割と職種間の連携・協働について教授した。

3) 総合実習(継続看護コース)

4年次後期の継続看護コースでは、慢性疾患等を持ちながら在宅で生活する高齢者の受診の背景(要因)や、医療機関の救急外来を含む外来受診時の、心身・社会的な状況、看護の役割や各外来の専門性のある看護実践を理解することを教授した。

II. 研究

領域内で取り組んでいる研究活動は、以下の4つである。

1. 高齢者の在宅継続転倒予防プログラムと検知・支援モニタリング方法の開発と評価(科学研究費補助金・基盤研究B・2015年度)

1) 高齢者の転倒を検知するスマートフォンのアプリケーション開発のための検証実験

(1) 実験1: 多様な日常動作時の転倒検知率、誤検知率の検証

健康な成人が、高齢者としての歩行を可能とする擬似体験装具(以下、擬似高齢者装備)を装着し、歩く、階段、座る、立ち上がる時の転倒行動を実施した場合の転倒検知率と、同様の動作時の転倒誤検知率を算出した。その結果、転倒検知率は90.625%(転倒データ33個中、30データに転倒を検知)、誤検知率は1.887%(転倒以外のデータ53個中、1データに転倒を検知)となった。

(2) 実験2: 転倒検知アプリケーション端末からのサーバ間の送受信の動作性の検証

端末において転倒を検知後、そのデータのサーバ間の送受信・PCから端末間のメッセージの送受信、ならびに予期せぬ問題が発生の有無を確認した。

(3) 実験3: 高齢者が転倒検知アプリケーションとスマートフォンの使用可能性を検証

3名の高齢者が転倒検知アプリケーションのインストールされたスマートフォンを3週間腰部に装着した(起床時から入浴時まで)結果、転倒検知アプリケーション以外のアプリケーションが動作すると、元に戻す方法に困難さがみられた。

(4) 実験4: 転倒検知アプリケーションが、転倒した時に転倒と正確に判定できるかの検証

転倒時に正常に転倒検知のロジックが稼動し、検知ができていたことが検証された。

2) 次年度に向けた研究者間の調整

次年度から開始される転倒検知アプリケーションの装備したスマートフォンを用いた介入研究の研究計画のために、学内外の研究分担者との連携を強めて役割の分担を作成した。

2. 地域在住の認知症者と家族介護者の支援を担う潜在看護職の育成・教育プログラムの開発(科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究・2015年度)

潜在看護職における、地域で生活する認知症の人と家族介護者の看護支援への関心、認知症の人と家族支援に必要な学習ニーズ、ワークライフバランスを考慮した支援活動に対する希望、今後の活動の場、ならびに収入等の育成に必要な課題を明らかにするため、調査の実施が可能な協力対象者のいる対象者のフィールドを開拓し、調査票の作成を行った。

3. 高齢者の座位姿勢援助におけるクッションの選択による座位姿勢、下肢浮腫、血流への影響比較研究(看護学科研究費・2015年度)

片麻痺高齢者一例における、車いすクッションの種類の違いによる浮腫・血流の比較を調査し、発表した。今後も対象数を増やし、対象の状態に適したクッション選択の指標作成を目標に調査を継続する。

4. 摂食・嚥下障害、低栄養の問題をもつ在宅認知症高齢者に対する看護師の支援の構造化に関する研究(看護学科研究費・2015年度)

摂食・嚥下障害、低栄養の問題を持つ在宅認知症高齢者に対する訪問看護師の支援の構造化を目的としてインタビューによる質的研究を実施した。現在分析途中である。

「点検・評価」

1. 教育

学部教育である老年看護学の関連授業・実習においては、昨年度の評価を踏まえて、さらに授業と実習が連動し、学生が老年看護学で必要とする看護技術の学習を深められるように授業内容・演習内容を

改善することができた。

2. 研究

研究活動については、領域構成員がそれぞれに研究テーマを持ち積極的に研究を遂行し、発表している。特に外部の競争的資金である科学研究費補助金の2研究を今年度新規に獲得できたため、今後、それぞれについて領域内構成員ならびに学内外の研究分担者の協力を得て、精力的に研究を遂行し、発表していく課題がある。

研究業績

I. 原著論文

- 1) 新出まなみ¹⁾、杉山みち子¹⁾ (¹神奈川県立保健福祉大)、梶井文子、葛谷雅文(名古屋大)。介護保険施設における高齢者の最期まで「食べること」を支援し看取するための栄養ケア・マネジメント(第1報)経口移行加算、経口維持加算(Ⅰ)、経口維持加算(Ⅱ)、看取り関連加算の体制と1年間の経口摂取による看取り数との関連。日健栄システム会誌2016;15(2):4-11.
- 2) 新出まなみ¹⁾、杉山みち子¹⁾、梶井文子、高田健人¹⁾ (¹神奈川県立保健福祉大)、葛谷雅文(名古屋大)。介護保険施設における高齢者の最期まで「食べること」を支援し看取するための栄養ケア・マネジメント(第2報)経口摂取を継続して看取った要介護高齢者の終末期(看取りまでの1年間)の体重、食事摂取状況。日健栄システム会誌2016;15(2):20-6.
- 3) 坂東美知代、草地潤子、櫻井美代子。要介護高齢者の下肢浮腫の経時的変化について 個人属性とセルフケア行動からの検討。桜美林大心理研2015;5:91-104.

II. 総説

- 1) Hooper L¹⁾, Abdelhamid A¹⁾, Attreed NJ¹⁾, Campbell WW (Purdue Univ), Channell AM¹⁾, Chassagne P (Rouen Univ), Culp KR (Univ Iowa), Fletcher SJ (Bradford Teaching Hosp), Fortes MB²⁾, Fuller N (Univ Liverpool), Gaspar PM (The Goodman Group), Gilbert DJ³⁾, Heathcote AC (James Paget Univ), Kafri MW (Birzeit Univ), Kajii F (St. Luke's Int Univ), Lindner G (Inselhospital), Mack GW (Brigham Young Univ), Menten JC⁴⁾, Merlani P (Ente Ospedaliero Cantonale), Needham RA (Drayton St Faiths Med Practice), Olde Rikkert MGM (Radboud Univ), Perren A (Ospedale Regionale Bellinzona e Valli), Powers J (Vanderbilt Univ), Ranson SC¹⁾, Ritz P (Chu de Toulouse), Rowat AM (Edinburgh Napier Univ), Sjöstrand F (Södersjukhuset),

AB, Karolinska Institutet), Smith AC³⁾, Stookey JJD (Childrens Hosp Oakland Res Inst), Stotts NA⁴⁾ (⁴Univ California), Thomas DR (Saint Louis Univ), Vivanti A (Princess Alexandra Hosp), Wakefield BJ (Iowa City Veterans Affairs Healthcare System), Waldréus N (Södertälje Sjukhus), Walsh NP²⁾ (²Bangor Univ), Ward S³⁾ (³Norfolk Norwich Univ), Potter JF¹⁾, Hunter P¹⁾ (¹Univ East Anglia). Clinical symptoms, signs and tests for identification of impending and current water-loss dehydration in older people. Cochrane Database Syst Rev 2015; 4: CD009647.

- 2) 亀井智子¹⁾、千吉良綾子¹⁾ (¹聖路加国際大)、正木治恵(千葉大)、泉キヨ子(帝京科学大)、松本佐知子(松戸ニッセイエデンの園)、島橋 誠(日本看護協会)、堀内ふき(佐久大)。認知症および認知機能低下者を含む高齢入院患者群への老年専門職チームによる介入の在院日数短縮等への有効性 システムティックレビューとメタアナリシス。老年看護学2016;20(2):23-35.

III. 学会発表

- 1) Fukukawa Y¹⁾, Onoguchi W¹⁾ (¹Waseda Univ), Niino (Oberlin Univ), Kamei T²⁾, Kajii F, Chigira A²⁾ (²St. Luke's Int Univ). Social network dynamics and quality of life among older people in a fall-prevention program. 11th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology and Psychological Association of the Philippines 52nd Annual Convention. Cebu City, Aug.
- 2) 杉本知子(千葉県立保健医療大)、亀井智子¹⁾、梶井文子、千吉良綾子¹⁾、山本由子¹⁾ (¹聖路加国際大)、入江由香子(高崎商科大)、新野直明(桜美林大)。示説7群:介護予防)在宅後期高齢者の転倒予測因子:「転倒骨折予防実践講座」参加開始からの12週間の追跡調査の分析。第20回日本在宅ケア学会学術集会。東京、7月。
- 3) Kusachi J, Araki M, Yokoyama E (Natl Defense Med Coll). Lower-extremity edema, blood flow, and sitting posture involving an elderly patient with hemiplegia-comparison of different seat cushions for wheelchairs. 第2回国際ケアリング学会学術集会。東京、11月。
- 4) Yokoyama E (Natl Defense Med Coll), Kusachi J, Tsuji Y (Kanagawa Univ Human Services), Konagaya M (Showa Univ), Saeki Y (Ehime Univ). Postural care for elderly, wheelchair-bound individuals in long-term care facilities. 第2回国際ケアリング学会学術集会。東京、11月。

- 5) 永澤成人, 小長谷百絵 (上智大). (一般演題 研究報告・実践報告 (示説)) 「検体測定室」の可能性セルフ健康チェックが糖尿病予防への契機となるか. 第20回日本糖尿病教育・看護学会学術集会. 高松, 9月. [日糖尿教学会誌 2015; 19(特別号): 201]

IV. 著 書

- 1) 梶井文子. 第2章: 日常生活援助技術 1. 食事, 3. 活動 ①体位変換, ②廃用症候群の予防, ③移動介助 (車椅子), ④歩行介助. 亀井智子 (聖路加国際大) 編. 根拠と事故防止からみた老年看護技術. 東京: 医学書院, 2016. p.58-106, 159-96.
- 2) 梶井文子. 第1章: 状態像に応じた在宅ケア IV. 栄養障害, 摂食嚥下障害, 脱水と在宅ケア. 日本在宅ケア学会編. 在宅ケア学 第5巻: 成人・高齢者を支える在宅ケア. 東京: ワールドプランニング, 2015. p.45-50.
- 3) 梶井文子. 第2部: 実践編 第1章: 病の軌跡とエンド・オブ・ライフケア-病状経過のプロセスにおける支援のタイミングと留意点- III. 慢性腎不全とともに生きる人と家族のエンド・オブ・ライフケア. 日本在宅ケア学会編. 在宅ケア学 第6巻: エンド・オブ・ライフと在宅ケア. 東京: ワールドプランニング, 2015. p.87-92.
- 4) 草地潤子. 第3章: 高齢者の生活と看護 1. 食べる・飲む, 2. 排泄する, 3. 活動 (呼吸・循環) する. 川島みどり (健和会臨床看護学研究所, 日本赤十字看護大) 監修. 老年看護学. 改訂版. 東京: 看護の科学社, 2015. p.45-94.

V. その他

- 1) 新出まなみ¹⁾, 杉山みち子¹⁾ (¹神奈川県立保健福祉大), 梶井文子, 葛谷雅文 (名古屋大). 介護保険施設における高齢者の最期まで「食べることを」を支援し看取るための栄養ケア・マネジメント (第3報) 最期まで経口摂取を継続して看取った入所高齢者の終末期と看取り期の栄養ケア計画の実際. 日健栄システム会誌 2016; 15(2): 27-32.
- 2) 松谷美和子¹⁾, 大久保暢子¹⁾, 飯田眞理子¹⁾, 五十嵐ゆかり¹⁾, 井上麻未¹⁾, 宇都宮明美¹⁾, 大橋久美子¹⁾, 小野若菜子¹⁾, 梶井文子, 加藤木真史¹⁾, 木戸芳史¹⁾, 倉岡有美子¹⁾, 佐居由美¹⁾, 千吉良綾子¹⁾, 鶴若麻理¹⁾, 長松康子¹⁾, 眞鍋裕紀子¹⁾, 三森寧子¹⁾, 山田雅子¹⁾, 高橋昌子¹⁾ (¹聖路加国際大). 聖路加国際大学看護学部 2015年度刷新カリキュラム. 聖路加国際大紀 2016: 2: 88-93.
- 3) 入江由香子 (高崎商科大), 亀井智子¹⁾, 梶井文子, 杉本知子 (千葉県立保健医療大), 糸井和佳 (帝京科学大), 山本由子 (武蔵野大), 千吉良綾子¹⁾ (¹聖路

加国際大), 小坂井留美 (北翔大). 多因子介入プログラムで構成する転倒骨折予防実践講座が在宅高齢者の体力に及ぼす影響 都市部で開催した People-Centered Care 事業における実践報告. 聖路加看会誌 2015; 19(1): 19-26.

精神看護学

教授: 香月 毅史 精神看護学
講師: 石川 純子 精神看護学

教育・研究概要

教育では, 概論, 対象論, 方法論の流れを踏まえ, 社会的視点, 生物学的視点, 心理学的視点からポイントを整理して理解できる講義を考案した。1年生の精神看護学概論では, 近年のセルフヘルプ, ピアサポートの活動例を紹介し, メンタルヘルスが学生の身近な問題として再認識できる機会を多く設けた。講義では, 基本的学習内容を網羅し, その上で学生自身が興味を抱く内容についてさらに詳しく学ぶ機会として, DVD ビジュアル教材を使用し, さらに海外の精神医療事情を紹介することで日本の精神医療を客観視する視点を育てることを目標とした。また, 精神保健の対象を患者に限定せず, 学生自身が自分もまた対象の一人であることを意識できる講義を心がけた。2年生の精神看護対象論では, 精神医学研究の医師が代表的な精神疾患の原因, 症状, 薬効, 副作用を専門家の視点から解説した。その後, 看護師の視点, 当事者の視点から疾患を抱えた生活を捉え直し具体的な看護問題を考察する授業を行った。また, 精神科医療の特徴的な視点を重視し, 看護師自身のメンタルケア, 家族ケア, 地域での生活援助等, 他の領域との連携について考察する機会を多く設けた。また, 精神看護方法論では, 精神保健福祉法を基本法として行われる現在の日本の精神医療・精神看護について, 対象者の行動制限のとらえ方, 支援の在り方についてクリティカルな視点で考察する能力を育てることを目標とした。臨地実習では, 精神科の臨床現場で, 実際の患者と接することで実際の患者の思いを受け止め, 共に考えることを学ぶ機会を設けた。患者-看護師関係が支援される側と支援する側の関係だけでなく, 看護師が患者と共に生活し, 病棟の環境を「耕す」という精神科特有のダイナミズムを学ぶことも学習目標とした。4年次の総合実習では, 目的目標を再度検討し, 精神科スーパー救急病棟でクリティカルパスに沿って早期治療に挑む最新医療を体験する機会と退院後の生

活に向けたリハビリテーション医療を体験する機会を設定した。

研究活動は、東日本大震災後の一般市民の精神的影響について継続的に調査を行い、全国データを分析した。2次調査を終え、結果は9月に横浜で行われた international academic consortium で発表した。

また、ヒューマンケアリングアプローチとディスコース分析の研究も継続的に行っている。

「点検・評価」

学生からのフィードバックは、毎回授業後のリアクションペーパーの内容から把握し、それに対する教員からのフィードバックを学生に返すことができるように工夫した。学外の当事者によるピアサポートグループを招いて直接語り合う機会を設定した。当事者の主体的活動の一環に触れる機会を設定することで、学生の患者・当事者に対するイメージが多様化した。座学では難しいことも、実体験で容易に獲得できる好例であった。

学外の研究費の獲得については、2015年度は科学研究費補助金による研究を終了し最終報告を行った。

研究業績

Ⅲ. 学会発表

- 1) 石川純子, 佐々木愛 (吉祥寺病院), 岡美智代 (群馬大). (示説: 第23群 精神看護) 精神科医療における強制入院に関する当事者の思いに焦点をあてた研究の動向と今後の課題. 第35回日本看護科学学会学術集会. 広島, 12月. [日看科学会講集2015; 35回: 688]

小児看護学

教授: 濱中 喜代 小児看護学
准教授: 高橋 衣 小児看護学

教育・研究概要

学部教育では、概論および方法論・演習を学内講義とし、小児病棟・小児外来・NICU・子ども発達センターでの実習で小児看護実践能力を習得し教育評価を行った。特に、日常的な臨床場面での子どもの権利擁護の実践を高めるための教育方法・学生が主体的に技術演習に取り組むための教育方法を検討した。また、4年生総合実習(小児臨床看護コース)では、急性期病棟において小児に特化した看護、チー

ムの一員としての役割を習得した。

Ⅰ. 看護基礎教育における看護倫理と子どもの権利擁護に関する教育の実態調査

全国の看護基礎教育機関214校の小児看護領域担当教員を対象として、自記式質問紙を用いた調査により、看護基礎教育における看護倫理と子どもの権利擁護の教育の実態を調査したものである。看護倫理に関する教育は9割の学校が実施しており、看護学概論1～2コマの講義が48%と最も多く、単元として「看護倫理」実施割合は12%であった。看護倫理に関する教育の現状認識は、十分にできている44%、十分とは思えない41%と認識が分かれていた。子どもの権利擁護に関する教育は、すべての学校で実施されており、小児看護学概論・小児看護方法論(援助論)・小児看護学実習でそれぞれ展開されているが、いずれも知識に留まる傾向にあった。また、方法論・実習においては、子どもの権利擁護に関する教育内容は、小児看護学概論に比べ少ない傾向にあった。教育の現状認識では、大学短大では満足傾向にあり、専門では満足していない傾向にあった。ヘルスサイエンス研究2015; 19(1): 25-30に掲載した。

Ⅱ. 小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセス

小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセスを明らかにすることを目的とした質的帰納的研究である。対象は、関東圏にある大学附属病院3施設の小児看護経験5年以上の看護師14名である。結果、コアカテゴリー【子ども中心に考える力】の発展プロセスとして明らかになった。発展プロセスは、〈指示のままに動き、自分で考えられない〉〈非言語化されたルールに従ってしまう〉〈子ども中心に考える力を形成し一歩踏み出す〉〈子どもの立場に立ち皆を巻き込んで実践する〉の4段階で構成されていた。さらに、【子ども中心に考えられる力】の強まりに影響をもたらすのは、〈子どもの力の確信〉〈子どもの力を伝える工夫力〉〈子どもに引き寄せられる思い〉の3つの力であった。発展プロセスは、小児の臨床場面、看護基礎教育、現任教員、研究に適用し、看護師の子どもの権利擁護実践をより早く可能にできることが考察された。日本小児看護学会第24回学術集会で発表した。

Ⅲ. 子どもの権利擁護実践に至るプロセスを発展させる力を強める方略

Ⅱの研究に継続して、小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセスを発展させる力を強める方略を明らかにした。子どもの権利擁護を発展させる3つの力〈子どもの力の確信〉〈子どもの力を伝える工夫力〉〈子どもに引き寄せられる思い〉を強める6つの方略〈子どもに関わる経験の蓄積〉〈常に子どもに目を注ぐ経験の蓄積〉〈子どもに対する受け持ち意識が高まる経験の蓄積〉〈子どもへの関わり方の根拠となる知識の獲得〉〈スタッフと協力し合いながら子どもに関わる蓄積〉〈子ども中心に考える力を強める場の設定と参加〉の6つが明らかとなった。また、強める場としては、〔疑問を語れる場〕〔子どもの力を伝え合う場〕〔気がかりな子について話し合う場〕であった。東京女子医科大学看護学会第11回学術集会で発表した。

Ⅳ. 軽度発達障害児の親が抱く入院での対応・環境・治療やケアに関するニーズと支援の在り方

過去に小児病棟に入院経験のある軽度発達障害児の親へのインタビュー調査から、軽度発達障害児の親が抱く入院での対応・環境・治療やケアに関するニーズについて明らかにした。結果は【児の世話役の確保】と【発達障害における特徴的な行動への配慮】の2つのカテゴリーが抽出された。軽度発達障害児が入院する際の支援として、発達障害の啓蒙活動や医療従事者の連携と情報共有による個別的で統一された対応、親が安心して子どもを入院させることができるような面会・付き添いへの配慮などが必要であることが考察された。

Ⅴ. 気管支喘息患児をもつ家族に対する環境指導の現状

小児病棟では喘息指導を計画的に取り入れ、環境指導においても自宅での環境調査を行った上で指導を行っている。今回、入院している2歳以上の小児気管支喘息（以下、喘息）患児の家族を対象に、環境指導を行い、入院時と2回目外来受診時においてアンケート調査より、環境整備の内容と指導に対する患児の家族の認識・実施度に関する調査を実施した。環境指導の継続性・実行性・負担感を明らかにし、今後病棟での環境指導でどのような工夫が必要かを検討した。結果、入院前後で、実施頻度が増えた項目は、拭き掃除（13名）、1畳あたりの掃除機をかける時間の延長（13名）、布団シーツの洗濯（11名）であり、入院前と後で実施頻度が減った項目は、

掃除機がけ（5名）、布団の掃除機がけ（4名）であった。日常的に実施していないものは必要性が理解できても家族が継続・実行に移すには負担を感じやすいこと、日常的に実施していた項目を支援し、より効果的に行っていきける方法を指導していく事で家族が実行に繋げやすくなることが明らかになった。

「点検・評価」

教育においては、教育評価に基づき改善していくとともに、小児看護への魅力を伝えつつ、子どもの権利擁護の実践・子どもの発達支援・FCC（ファミリーセンタードケア）を中心に講義・実習を再構築していきたい。また、学生の研究では、研究的な思考で子どもの現状を考察できる能力を高めるように指導したい。教員の研究では、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴで明らかになった課題を基に、継続的に追及していく。また、積極的に研究に取り組んでいき、学部教育・現任教育・小児看護に還元していきたい。

研究業績

Ⅲ. 学会発表

- 1) 高橋 衣. 「子どもの権利擁護実践に至るプロセス」を発展させる力を強める方略. 東京女子医科大学看護学会第11回学術集会. 東京, 10月.
- 2) 高橋 衣. 子どもに携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセス. 日本小児看護学会第25回学術集会. 千葉, 7月.
- 3) 高橋 衣, 嶋澤順子, 久保善子, 佐竹澄子, 石川純子, 北 素子, 村田洋章 (東京医科歯科大), 瀬山留加, 櫻井美代子. (一般演題 (示説): 教育評価) 主体的学習態度を育てるコンピューター試験の導入とその評価. 日本看護学教育学会第25回学術集会. 徳島, 8月.

Ⅴ. その他

- 1) 高橋 衣, 濱中喜代. 看護基礎教育における看護倫理と子どもの権利擁護に関する教育の実態調査. ヘルスサイエンス研 2015; 19(1): 25-30.

母性看護学

教授: 茅島 江子 女性の健康と看護ケア
准教授: 細坂 泰子 周産期ケア, 新生児清潔ケア, 育児

教育・研究概要

女性のライフスタイル各時期における様々な健康問題について研究し、母性看護における看護援助の

あり方について考察した。

I. 骨盤臓器脱患者のペッサリー使用状況と性生活・日常生活への影響

A 病院に通院するペッサリー適応の骨盤臓器脱の患者 91 名についてペッサリー挿入前後の症状、性生活・日常生活への影響を検討した。対象の平均発症年齢は 68 歳、平均年齢は 75.8 歳で、ペッサリー挿入前には、子宮下垂感 83.5%、排尿障害 26.4%、帯下が多い 7.7%が多く、挿入後では、帯下が多い 28.6%、排尿障害 24.2%、出血 23.1%の症状が多かった。インタビューできた 7 名全員がペッサリー挿入後には性生活をしておらず、性生活で症状がひどくなるのではないかなどの不安があった。日常生活では排便時に薄い手袋をして性器が出るのを押さえる、座るときにゆっくりと座るなどの対処を行っていた。

II. わが国の妊娠・分娩・産褥期における性生活・性機能に関する文献検討

わが国の妊娠分娩産褥期における性生活・性機能に関する 19 文献を分析し、妊娠期は非妊時に比べて性生活の頻度は減少し、産褥期は性交再開をしていない人が年代を追う毎に増加傾向にあり、妊娠期から夫を含めた性生活に関する指導の必要性が示唆された。

III. しつけと虐待の境界モデルの実践的活用

本研究では「学童前児童を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相」で得られた知見が、育児を行う母親やその周囲にとって育児不安に対する解消の契機となるか、実践での活用性について考察することを目的とした。「学童前児童を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相」で明らかになった 23 の概念をもとにパンフレットを作成し、子育て当事者とその支援者にその経験と照らし合わせた自由記述を自記式質問紙で分析する。現在、データ取集中である。

IV. 学童前児童を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相

本研究の目的は、学童前児童を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相を、物語られる育児行動に着目して分析し明らかにすることである。方法：学童前児童を養育する母親 26 名を対象にしつけと虐待の境界と思われた体験を中心に半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

を用いて質的に分析した。しつけと虐待の境界に関連する様相を示すカテゴリーとして【無意識下に存在する母親から子どもへのパワー】、【子どもの属性で異なるしつけ】が抽出された。その他に【しつけに対する他者評価の優位性】、【しつけの閾値を下げる母親の理想像と疲弊】、【しつけに影響する周囲の力と母親の能否】が示された。育児を担う母親への支援として他者からの評価サポートや知識の提供、母親に対する道具的サポートの支援の重要性が示唆された。

V. 客観的指標を用いた沐浴とドライテクニクの検討

本研究の目的は、産後 1 日目以降の新生児に性別と体重による層別ランダム化を用いて、新生児の体温変化、細菌数変化、におい指数、体重変化の客観的指標を比較検討し、新生児にとって最適な清潔ケアを検討することである。対象は正期産で出生し、出生時に異常がなく、出生体重が 2,500g 以上の新生児計 27 名とし、産後 1 日目から沐浴を実施する沐浴群 13 名と産後 1 日目からドライテクニクを実施するドライテクニク群 14 名に分類した。評価方法は、新生児の属性、臍周囲の細菌数と菌種、頭部において、体重と体温、黄疸値と母乳回数、皮膚水分量とした。沐浴群とドライテクニク群では新生児の属性、臍周囲の細菌数と菌種、頭部において、体重と体温、黄疸値、母乳回数、皮膚水分量は有意でなかった。本研究結果では正期産で分娩時に異常のない新生児は産後 1 日目から沐浴を行ってもドライテクニクを行っても客観的指標に違いがあるとは言えず、どちらのケアもその優位性を結論付けることはできなかった。

「点検・評価」

骨盤臓器脱出のためにペッサリーを挿入した患者は、子宮下垂感は軽減するものの、その後も、排尿障害などの症状が持続し、性生活や日常生活への障害もあることが明らかになった。今後は、それらを考慮に入れた性生活指導のあり方について検討していく予定である。

また、妊娠・分娩・産褥期の性生活・性機能について文献検討した結果、それらの時期に性機能が低下していることが明らかになった。今後は、妊娠期からの性生活指導について検討していく予定である。

しつけと虐待の境界に対する実践的研究では、研究で得られた知見の有効性を検証していく予定であ

る。記述的研究では、学童前児童を養育する母親のしつけと虐待の様相として、母親が持つ子どもへの無意識のパワーと子どもの属性が明らかになった。育児を担う母親への支援として他者からの評価サポートや知識の提供、母親に対する道具的サポートの支援の重要性が示唆された。本研究結果を論文投稿中である。

新生児清潔ケアは正期産であればどちらのケアでもバイタルサイン等の客観的指標および細菌学的評価で有意ではなかった。しかし今回のデータの対象人数が少ないことからデータが有意でなかった可能性もある。今後はより多くの症例で分析する必要がある。

研究業績

I. 原著論文

- 1) 今村久美子¹⁾, 藤村博恵¹⁾, 大森智美¹⁾ (1 埼玉医科大学), 茅島江子. わが国の妊娠・分娩・産褥期における性生活・性機能に関する文献検討. 埼玉医大看紀 2016; 9(1): 55-62.
- 2) 西 佳子, 茅島江子. 骨盤臓器脱患者のペッサリー使用状況と性生活・日常生活への影響. 日性科会誌 2015; 33(1): 57-68.
- 3) 細坂泰子, 茅島江子, 坂田博子¹⁾ (1 東京女子医科大学). 新生児清潔ケアの実態とケア選択の探索 混合研究法を用いて. 日助産会誌 2015; 29(2): 240-50.

III. 学会発表

- 1) 細坂泰子, 茅島江子. (一般演題 (口演)): 子育て支援) 学童前児童を養育する母親のしつけと虐待の様相. 第 30 回日本助産学会学術集会. 京都, 3 月. [日助産会誌 2016; 29(3): 514]
- 2) 細坂泰子, 茅島江子, 中野美穂. (一般演題 (口演)): 31 群 小児看護/母性看護・助産) 客観的指標を用いた新生児清潔ケアの検討. 第 35 回日本看護科学学会学術集会. 広島, 12 月. [日看科学会講集 2015; 35 回: 499]
- 3) Imamura K (Saitama Med Univ), Kayashima K. (Posters: Track: 7. Sexual health & sexual rights (actions and advocacy)) Factors influencing women's resumption of sexual intercourse from 4 to 5 months, postpartum. 22nd Congress of the World Association for Sexual Health. Singapore, July. [J Sex Med 2015; 12(Suppl.5): 379]
- 4) Nishi K, Kayashima K. (Posters: Track: 7. Sexual health & sexual rights (actions and advocacy)) The use of pessary among pelvic organ prolapse patients and its impact on daily life and sex life. 22nd Con-

gress of the World Association for Sexual Health. Singapore, July. [J Sex Med 2015; 12(Suppl.5): 380]

V. その他

- 1) 西 佳子, 茅島江子, 今村久美子¹⁾ (1 埼玉医科大). 第 22 回性の健康世界学会レポート. 助産誌 2016; 70(1): 56-8.
- 2) 茅島江子. 第 22 回性の健康世界学会 (WAS) 報告. 日本性科学会ニュース 2015; 34(3): 3.

地域看護学

教授: 嶋澤 順子 地域看護学
講師: 久保 善子 地域看護学
講師: 上田 修代 地域看護学
講師: 清水由美子 地域看護学

教育・研究概要

地域看護学では、教員が各々に 4 つの研究テーマについて取り組んでいる。1 つ目は、独立型訪問看護ステーション看護師による在宅精神障害者地域生活支援モデル開発に関する研究である。在宅精神障害者の地域生活支援においてますます重視される訪問看護の機能を明らかにすることを目指し、多様な地域にある独立型訪問看護ステーションでの調査を進めている。2 つ目は、産業看護職のキャリアアンカーに着目し、キャリアアンカーを明確にすることやキャリアアンカー尺度の開発を行っている。3 つ目は、保健師のリフレクションに関する研究を行っており、本年度は新任保健師のリフレクションスキルの獲得内容とリフレクション過程に関する研究を主にしている。4 つ目は、地域で生活している血液透析患者の保健・福祉に関する研究である。

また、2013 年から取り組んでいる第三病院との共同研究は本年度も継続し、結核患者の服薬および生活管理に対する入院中の指導の効果について研究を行っている。

「点検・評価」

各研究については、整理した調査データを調査対象者にフィードバックし、さらに各学会でその成果を発表した。今後も、外部研究資金の活用および応募を積極的に行い、研究継続を推進する予定である。また、第三病院との共同研究では、その調査結果をとりまとめ、東京慈恵会医科大学雑誌に論文が掲載された。

また、2015 年度より保健師の教育課程選択学生

が受講する公衆衛生看護学関連の科目・実習内容の検討を鋭意進めた^が、授業実施後は教育評価研究につなげて行きたいと考える。

研究業績

I. 原著論文

- 1) 嶋澤順子, 久保善子, 安元あかね, 須山悦代, 野村藍, 上田修代, 関口智子. 治療完遂した結核患者の服薬継続における体験と認識のプロセス. 慈恵医大誌 2015; 130(3): 61-71.
- 2) 桜井良太¹⁾, 清水由美子, 川崎千恵 (国立保健医療科学院), 長谷部雅美¹⁾, 村山幸子¹⁾, 倉岡正高¹⁾, 藤原佳典¹⁾ (¹東京都健康長寿医療センター研究所). ソーシャルキャピタルに着目したヘルスサポーターの養成プログラム作成の試み 参加者特性と養成講座参加に伴う意識変化の検討. 応用老年学 2015; 9(1): 129-37.
- 3) 川畑輝子¹⁾, 武見ゆかり¹⁾ (¹女子栄養大), 村山洋史²⁾, 西真理子²⁾, 清水由美子, 成田美紀²⁾, 金美芝²⁾, 新開省二²⁾ (²東京都健康長寿医療センター研究所). 地域在住高齢者に対する虚弱予防教室による虚弱および食習慣の改善効果. 日公衛誌 2015; 62(4): 169-81.

III. 学会発表

- 1) 久保善子, 鳩野洋子 (九州大), 久保智英 (労働安全衛生総合研究所). 産業看護職のキャリアアンカーに関する質的研究. 第88回日本産業衛生学会. 大阪, 5月. [産業衛誌 2015; 57(臨増): 429]
- 2) 高橋衣, 嶋澤順子, 久保善子, 佐竹澄子, 石川純子, 北素子, 村田洋章 (東京医科歯科大), 瀬山留加, 櫻井美代子. (一般演題 (示説): 教育評価) 主体的学習態度を育てるコンピュータ試験の導入とその評価. 日本看護学教育学会第25回学術集会. 徳島, 8月. [日看教会誌 2015; 25(学術集会講演集): 145]
- 3) 嶋澤順子, 久保善子, 瀬山留加, 梶井文子, 高橋衣, 佐竹澄子, 石川純子, 遠山寛子, 中川ひろみ, 北素子, 小松一祐, 塩原憲治. 看護学生の主体的学習能力獲得を支援する e-portfolio システム. 平成27年度教育改革 ICT 戦略大会. 東京, 9月. [教育改革 ICT 講集 2015: 286-7]
- 4) 久保善子, 瀬山留加, 梶井文子, 高橋衣, 佐竹澄子, 石川純子, 遠山寛子, 中川ひろみ, 北素子, 嶋澤順子, 塩原憲治, 小松一祐. 看護学科における e-ポートフォリオシステムの開発と教育の評価. 第132回成医会総会. 東京, 10月. [慈恵医大誌 2015; 130(6): 185]
- 5) 杉澤秀博 (桜美林大), 清水由美子, 熊谷たまき (順天堂大). 透析患者の健康状態の経済階層による格差

年齢, 時代, 生年コホートによる違いはあるか. 日本老年社会学会第57回大会. 横浜, 6月. [老年社会科学 2015; 37(2): 219]

- 6) 清水由美子, 杉澤秀博 (桜美林大), 熊谷たまき (順天堂大). (一般演題 (示説): 第4分科会: 保健行動・健康教育) 血液透析患者実態調査からみた自己管理をしていない中高年患者の特性. 第74回日本公衆衛生学会総会. 長崎, 10月. [日公衛会抄集 2015; 74回: 299]
- 7) Shimasawa J, Osawa M¹⁾, Kubo Y, Ueda N¹⁾ (¹Gunma Prefectural Coll Health Sci). (Poster session: Session E) Characteristics of community life support provided by public health and home visiting nurses for the mentally ill people. 6th International Conference on Community Health Nursing Research (ICCHNR 2015). Seoul, Aug. [6th ICCHNR Conference Abstracts 2015; 0373]
- 8) Ushio Y¹⁾, Matsushita M (Gifu Coll Nursing), Shimasawa J, Iino R (Chiba Univ), Shiomi M¹⁾ (¹Hyo-go Univ), Miyashita T (Kanagawa Univ Human Services). (Poster session: Session G) Developing tool to evaluate learning of the community health nursing process at the baccalaureate level (report1): students' learning on community health needs assessment from their instructor's assessment. 6th International Conference on Community Health Nursing Research (ICCHNR 2015). Seoul, Aug. [6th ICCHNR Conference Abstracts 2015; 0325]
- 9) Shiomi M¹⁾, Ushio Y¹⁾, Matsushita M (Gifu Coll Nursing), Shimasawa J, Iino R (Chiba Univ), Miyashita T (Kanagawa Univ Human Services), Komaki K¹⁾, Takemura K¹⁾ (¹Univ Hyogo). (Poster session: Session D) Developing tool to evaluate learning of the community health nursing process at the baccalaureate level (report2): development of an original rubric draft to evaluate learning outcome. 6th International Conference on Community Health Nursing Research (ICCHNR 2015). Seoul, Aug. [6th ICCHNR Conference Abstracts 2015; 0292]
- 10) 大澤真奈美¹⁾, 坪井りえ¹⁾, 鈴木美雪¹⁾, 塩ノ谷朱美¹⁾, 齊藤基¹⁾ (¹群馬県立県民健康科学大), 丸谷美紀 (鹿児島大), 嶋澤順子. (一般演題 (示説): 第5分科会: 親子保健・学校保健) 乳幼児虐待予防に向けて乳幼児健診時に活用するアセスメント項目に関する文献検討. 第74回日本公衆衛生学会総会. 長崎, 10月. [日公衛会抄集 2015; 74回: 299]

IV. 著書

- 1) 清水由美子. 第1章: 人々の基本的な生活と人間のあ

り方, 第9章: 保健活動. 清水英佑監修. みるみるナーシング: 健康支援と社会保障制度 2016. 東京: 医学評論社, 2015. p.2-8, 13-9, 156-87.

V. その他

- 1) 北 素子, 嶋澤順子, 高橋 衣, 村田洋章, 佐竹澄子, 瀬山留加, 石川純子, 久保善子, 櫻井美代子, 小松一祐, 塩原憲治. 看護学生の主体的学修力獲得を支援する electronic-portfolio システムの導入. 大学教育と情報 2015: 2015 年度(1): 37-40.
- 2) 透析医療研究会 (杉澤秀博 (桜美林大), 清水由美子, 熊谷たまき (大阪市立大), 大平整爾¹⁾²⁾ (札幌北クリニック), 杉崎弘章¹⁾³⁾ (八王子東町クリニック), 篠田俊雄¹⁾ (日本透析医会), 浅野兵庫 (全国腎臓病協議会)) 編. 要介護透析患者に対するケアマネジメントの実際と効果. 要介護透析患者に対するケアマネジメントの実際と効果: 平成 27 年度自主研究事業報告書. 東京: 統計研究会, 2016.

在宅看護学

教授: 北 素子 在宅看護学
講師: 遠山 寛子 在宅看護学

教育・研究概要

在宅看護学では学部教育として, 平成 23 年度より, 在宅看護学概論から演習型授業での在宅看護援助論, 在宅看護学実習という一連の学習過程において, 在宅看護の特徴を踏まえた看護過程の展開能力修得に重点をおいている。本年度も継続して, その教育評価研究を行った。また, 各教員の関心テーマに沿った研究を進めた。

I. 在宅看護学領域における反転授業評価: 知識の定着を目指す

在宅看護に特徴的なアセスメントの視点を教授するために, 従来講義内で実施していた疾患や症状のメカニズムについて e-ラーニングを活用して事前学習を行い, 講義の中でアセスメントのポイントを重点的に教授する反転授業を導入している。これまでの経過で, 反転授業の効果を検証したところ, 反転授業の評価として授業目標の 1 つであるアセスメントポイントの理解度と事前課題である講義の動画視聴の有無による違いは見られなかったため, 効果があつたかどうかを検証するにいたらなかった。そこで, 知識の定着を図るために動画視聴後にそれらの知識を学生自身が整理できるようにワークシート

を導入した。その結果, ワークシート作成により知識の確認がよくできたと自己評価が高い学生ほど, 定期試験における該当部分の得点が高いことが判明した。今後これらを活用しながら, 在宅看護援助論へとつなげてく更なる方略が必要である。

II. 急性期病院における認知症高齢者ケースの退院支援プロセス構築の研究

近年, 認知症を有する高齢者が他の疾患の治療を目的として急性期病院に入院する機会が増えているが, その退院支援は困難ケースに挙げられる。認知症特有の困難性に対応した退院支援モデルを開発するための第 1 段階として, 急性期病院の退院支援部門の看護師が関わる認知症高齢者の退院支援プロセスを明らかにした。その結果, そのプロセスは予定入院であったか, あるいは予定外の緊急入院であったかで異なり, 予定入院では入院治療の意思決定支援が, 緊急入院では家族支援が重要であることが明らかになった。より実用性のある退院支援モデルの完成には, 予定入院と緊急入院という異なるバージョンのモデル開発が必要であり, そのためにさらに, 1. 予定入院における入院治療選択の意思決定プロセス, 2. 緊急入院ではそれをきっかけにはじめて親の認知症に直面する家族の辿るプロセス, そして 3. 入院した認知症高齢者が短期間に安全に治療を完了するプロセスという 3 つのプロセスをより詳細に探求する必要があると考えられた。

III. 訪問看護師が捉える家族介護者との情報共有の実態: 家族介護者からの視点

在宅療養の現場では, 訪問時に適切なケア提供をするためには家族との情報共有はきわめて重要である。訪問看護師が家族との連携において, 必要としている療養者に関する情報の具体的な内容や共有方法の実態を明らかにする研究を実施した。家族介護者が求める情報としては, 家族が不在中の療養者の状態であった。些細な変化であっても医学的な視点からアセスメントした内容を家族介護者は必要としていた。これらの具体的な内容を吟味し, 訪問看護師と家族介護者が活用できる具体的なシステム構築を目指す。

「点検・評価」

在宅看護学では, 積極的にアクティブラーニングを取り入れている。その教育評価に継続的に取り組んでおり, 今回は反転授業の有効性を検討した。その検討内容を参考に, 今後さらなる授業改善を行っ

ていく必要がある。また教育評価研究を継続し、より効果的な教育の実施を目指していく。

各教員が取り組んでいる研究は、いずれも在宅看護学領域では重要なテーマであり、領域内でサポートしあい、さらに発展的に取り組んでゆきたいと考える。

研究業績

Ⅲ. 学会発表

- 1) Motoko K, Reiko Y, Hiroko T. Difficulties encountered by the families of elderly people with dementia admitted to acute care hospitals. IFNA 2015 (12th International Family Nursing Conference). Odense, Aug.
- 2) Hiroko T, Motoko K. Actual situation of information sharing with family caregivers observed by visiting nurses. IFNA 2015 (12th International Family Nursing Conference). Odense, Aug.
- 3) 杉山友理. (示説：第10群 在宅看護) 生活リズムが整わずひきこもりがちな発達障がいをもつ子どもとその母親に対する訪問看護師の関わり. 第35回日本看護科学学会学術集会. 広島, 12月. [日看科学会講集 2015; 35回: 415]

Ⅳ. 著 書

- 1) 久田 満 (上智大), 北 素子, 谷口千絵 (神奈川県立保健福祉大). 看護に活かす心理尺度：その選び方・使い方. 京都：ナカニシヤ出版, 2015.
- 2) 北 素子. 第5章：在宅看護における看護過程. 原礼子 (慶應義塾大) 編. プリンシプル在宅看護学. 東京：医歯薬出版, 2015. p.62-91.
- 3) 北 素子. 第6章：統合的中範囲理論 ニード論理論編. 黒田裕子 (徳島文理大) 編. 看護診断のためのよくわかる中範囲理論. 第2版. 東京：学研メディカル秀潤社出版, 2015. p.404-15.
- 4) 北 素子. 第IV章：家族看護実践に役立つ考え方 7. 実践例 ⑦認知高齢者を介護する家族：家族内ニーズの競合調整と生活リズムの安定化. 山崎あけみ (大阪大), 原 礼子 (慶應義塾大) 編. 家族看護学：19の臨床場面と8つの実践例から考える. 改訂第2版. 東京：南江堂, 2015. p.190-203.
- 5) 北 素子訳. 第4部：データの分析, 成果の決定, そして研究の伝達 第27章：研究知見を広める. 黒田裕子 (徳島文理大), 中木高夫 (天理医療大), 逸見功 (日本赤十字看護第) 監訳. バーンズ & グローブ看護研究入門：評価・統合・エビデンスの生成. 原著第7版. 東京：エルゼビア・ジャパン, 2015. p.543-65.

V. その他

- 1) 北 素子, 嶋澤順子, 高橋 衣, 村田洋章, 佐竹澄子, 瀬山留加, 石川純子, 久保善子, 櫻井美代子, 小松一祐, 塩原憲治. 看護学生の主体的学修力獲得を支援する electronic-portfolio システムの導入. 大学教育と情報 2015; 2015年度(1): 37-40.
- 2) 北 素子. 「看護研究」の落とし穴質的研究の落とし穴. 日看研会誌 2015; 38(1): 33-6.